整理報告遺跡

川久保遺跡

（南魚沼郡湯沢町大字神立字川久保ほか）

川久保遺跡の概要については、「埋文にいがた」第69号で紹介しましたが、今回は、接合復元作業の終了した土器について紹介します。特徴としては、周辺地域との関連を示す文様を持った土器が多く認められることがあげられます。川久保遺跡に集落を構えるのは縄文中期前葉からですが、この時期、新潟県内では海岸平野部を中心に、半截竹管を用いた爪形文や平行線文を特徴とする北陸系の「新保新崎式土器」が主体を占めます。しかし、山間部では北陸系の土器は少なく、中部高地を中心とした土器が多く認められます。中部高地系土器は「後沖式」（写真１　上左）「焼町土器」（写真１　左上以外）と呼ばれる土器です。「後沖式」は、斜行する沈線や隆帯による楕円区画が特徴です。また、「焼町土器」は大きな環状の把手や舌状の隆帯が特徴です。このほか、関東、中部高地に分布する「勝坂式」「阿玉台式」と言った土器もあります。

中期中葉になると、火炎型土器を始めとする越後独自の土器が多く認められるようになります。火炎型土器では最も古手とされる破片もあります。また、王冠型土器の把手は、バラエティーに富みます（写真２）。これら火炎土器群は直接山を越えて群馬県に出ることはありませんでしたが、逆に関東地方の「加曾利Ｅ式」（写真３）と呼ばれる土器は後葉にかけて山を越えて入って来ます。この時期、新たに東北系の「大木式」が加わります。越後の火炎土器群と並んで最も安定して存在し、中心的位置を占めます。また、沈線で綾杉状の文様を描いた土器も特徴的です（写真４）。この土器は上中越地方を中心として分布するもので、同様の文様は信州地方でも多く認められ、「唐草文土器」と呼ばれています。写真４中央は、器形、文様構成が信州に近いものです。中期後葉から後期前半にかけても関東・中部高地の影響が見られます。

このように、川久保遺跡は群馬県境に近いこともあり、集落存続期間をとおして関東・中部高地方面と往来があったことを示しています。また、魚野川下流域（平野部）からは火炎土器群や大木式土器などが入ってきました。このように各地域の影響が認められる多くの土器が存在することは、当遺跡がこの地域の拠点集落であったことを物語っています。

（高橋　保）

1　中部高地系土器

2　火炎型・王冠型土器の把手

3　関東加曾利E式土器

4　綾杉文を多用する土器